

研究会事務局

山口研究室

ウィリアム、パトリック著／原田勝訳『アメリカ公共図書館史』  
(原書名：The American Public Library and the Problem of Purpose)  
についてのアメリカでの書評

.....

ここ数年、図書館史研究の翻訳書がいくつか出版された。図書館史研究への関心の高まりを示すものと思われる。そこでニュース・レター編集部では、原著作の発行地での書評を紹介することを企画した。

.....編集部.....

■ウィーガンド、ウェイン A. (Wiegand, Wayne A.) [ウィスコンシン大学マジソン校] の書評 <Library & Culture. (25) '90, spring 所収>

この本を読んで、私は自分自身にまつわるある事件を思い出した。それは、1972年にさかのぼり、当時私は国立公文書館で自分自身の博士論文に関する調査研究に従事していたが、そのときのことである。たまたま私が自分の研究対象として取り組んでいたのと同じ資料コレクションに年配の一人の紳士が向かっていたので、一息いれ彼に話しかけた。「どのような研究テーマをお持ちですか？」と私は尋ねた。彼は「ユダヤ人が第1次世界大戦を引き起こしたということを立証しようとしているのです」と答えた。私はグッと息を飲み込み、「ここであなたにそのことを確信させる文書が何か見つかったのですか？」と力なく応対した。それに大し、彼は「何もありません。しかし、そのことこそ私の主張を裏書きしているのです。ユダヤ人が証拠となるもののすべてを盗んだのです」と言った。私は、ばかばかしくなって、彼との会話を続けることをやめた。私が言いうることの何ものも、彼の考えを変えることはできなかったであろう。彼がその問題に取り組む以前に、すでに最終結論を出してしまっていたことは明らかである。

不幸なことであるが、この『アメリカ公共図書館とその目的に関する問題』という書物もまた、歴史的記録に対して、上に話した私のかつての経験と同様のアプローチをとっているように見える。(もっとも、上の話ほどひどくはないと認めるにやぶさかではない。)  
「図書館をその教育的任務に立ち返らせることの意義は疑問の余地がない」と、ウィリアムズは結びのところで論じている。「教育については、その価値を立証する必要がない。教育は、図書館が与えるもののすべてである。教育こそ、公衆が図書館に対して望んでいるものにほかならない。」(p.137)この本の著者は、130年におよぶアメリカ公共図書館の歴史を物語る記録にあたる前に、すでにアメリカ公共図書館の教育的“目的”を確信していたことに気付く。だから、彼は、たやすく利用できる交換された諸資料にもとづく乏しい検討から、しかも“教育”という言葉によって彼が意味しようとすることを精査することすらせず、アメリカ公共図書館は教育目的からはずされたとき失敗で、教育目的にかなう活動をしたときに成功したと言うのである。

なるほどこの本は刺激的な研究テーマである(上に述べた国立公文書館で出会った老人の研究テーマと同じように)が、悪質な歴史書でもある。これは、地域社会にとっての公共図書館の象徴的意義(たとえば、マーガリー・フリズビー(Margary Frisbie)の『書物の嗜好:アーリントン・ハイツ記念図書館の歴史1887-1987』[1987]を参照)、および検閲に反対し知的自由を擁護する図書館がこれまでに自己規定してきた役割(それは必ずしも常に達成されていないとしても)のような、著者が“重要ではない”とする諸目的を無視している。また、本書は、同一のテーマに関するフィリス・デイン(Phyllis Dain)の大変良くバランスのとれた論稿(彼女の「両面価値と逆説:公共図書館の社会的紐帯」Library journal 100号、1975、261-266)だけでなく、公共図書館の目的に関するマイク・ハリス(Mike Harris)の論争的な考え方(これはウィリアムズがなおざりにした文献のすべてへの導火線になるものである)に言及していないし、アメリカ公共図書館の歴史を通じて目的に影響を与えてきた人種差別的主義、性差別主義、土民保護主義、および異性愛正統主義(そのほかにも多くの主義があるが)といった問題を回避している。

本書が“教育”の定義をめぐる一連の定まった文化的“境界”(私はここで“目くらまし”を論じようとしている)を押しつけた(アラン・ブルーム(Allan Bloom)とE.O.ヒルシュ(E.O.Hirsch)だったかの模倣である)のでウィリ

アムズがアメリカ公共図書館のために唱えたまさに教育的“目的”が、歴史を通じて何百万冊となく何世代にもわたる利用者が図書館の蔵書から借り出していった通俗書を読むことによって起こり得る可能性と否定してしまうことになっている。ウィリアムズは、ジャニス・ラドウェイ (Janice Radway) の書いた『小説を読む』(1984)、ジェーン・トンプキンス (Jane Tompkins) の『感覚上の設計』(1985)、およびキャシー・デビッドソン (Cathy Davidson) の『革命と言葉：アメリカにおける小説の勃興』(1986) などのような評価の高い学問的成果に示された議論を知らないように見える。彼は、本書と同じシリーズに含まれ5年前に出版されたエブリン・ゲラー (Evelyn Geller) の有名な業績である『アメリカ公共図書館で禁止された書物 1876-1939』さえ見逃している。

おそらく私は学生に対して結局はこの書物を読むことを勧めるであろう。しかし、それは著者が意図したのとは異なった理由から推奨するのである。『アメリカ公共図書館とその目的に関する問題』は、図書館史研究の方法について、最近ではこのようにしてはならないという最善の事例を提供しているからである。

■ノーマン・スティーブンス (Norman Stevens : コネチカット大学図書館長)  
の書評

<Willson Library Bulletin (63) '89, May 所収>

#### 公共図書館の目的

このテーマについては、パトリック・ウィリアムズの『アメリカ公共図書館とその目的に関する問題』に十分に描かれている。アメリカ人の生活において公共図書館を適切に位置づけようとする私たちの努力に関する彼の幅広い歴史的検討は、重要な問題を取り扱っている。実際、彼は適切にして重要な諸活動をイベントを取り上げこの問題と吟味している。本書において、彼は以下に上げるポイントを内容とする章をたて、検討を加えている。すなわち、1841年から1878年の間の時期におけるボストン公共図書館の登場、1876年から1896年の間に時期においてわが専門職を悩ませた公共図書館におけるフィクションの位置付けに関する問題、1894年から1920年の時期にあらわれた図書館サービスにおける様々な改革について、1920年から1948年の時期における成人教育の推進力としての公共図書館について、1948年から1950年にかけて実施された公共図書館調査について、1950年から1965年の時期における公衆へのPRの強調、1965年から1980年の時期に前面に出てきた人々を抱える諸問題に対する情報提

供の問題、そして最後には1980年の新しい図書館サービス計画のガイドラインの登場を取り扱っている。

ウィリアムズは重要な諸々の論点を押さえていると思われ、諸論点にかかわるイベントや活動の事実に関する彼の記述もおそらく正当なものといえよう。しかしながら、結局のところ、彼は論証しようとしたまさにその問題を正しいものとして論を進めたにすぎず、彼の定期した歴史は、彼にとりあまりにも長すぎ、複雑にすぎたので、それが一体どのようなことを意味しているのかについて、彼は解釈に到達しえなかったと言わざるをいない。むしろ、彼は「公共図書館の関係者は、インフォーマルな自己教育のための機関として公共図書館の独自性を回復させるために努力すべきである」という示唆を与えようとしたのであったとしても、いささか不十分な内容にとどまっている。かつて公共図書館はそのような機能を発揮したのであったろうか？ウィリアムズはそのように考えているようである。残念なことであるが、みじかな参考文献のリストにあげられているだけガリソン (Garrison)、そしてハリス (Harris) やモルツ (Molz) のような重要な図書館史研究者の業績にウィリアムズが言及しなかったことは、彼の言わんとするところの全体を弱めるとともに、彼の業績の価値を減ずることになっている。

ウィリアムズの著作と比べ、はるかに重要でかなりうまく書かれたものが、キャスリン・モルツ (Kathleen Molz) の短い論稿、「情報時代の知識提供機関：特に公共図書館の場合」である。もともと1987年の議会図書館での書物に関するエンゲルハード・レクチャーとして話されたものであるこの論文において、モルツは基本的に1個の知識提供機関である公共図書館の様々な側面と今日の情報時代におけるその意義について上手な語り口でしかも熱っぽく述べている。この彼女の作品は、以前「公共図書館」と題して議会図書館で行われたローウェル・マーチン (Lowell Martin) の講演とともに、公共図書館の目的に関して、ウィリアムズの長い論稿よりもはるかに多くのことを私たちに教えてくれる。

T. D. ウェップ (T. D. Webb) の書いた『公共図書館の組織と構造』はまた、そのタイトルが示唆しているものにかかわらず、実際のところ、近代社会における公共図書館の役割を分析しようとする試みである。彼の前作である『公共図書館の機構改革』(1985)のために広範な公共図書館群から収集した資料を活用して執筆されたこの研究は、詳細に組織図、事務分掌、およびその他の公式の記

録を通じて、対象とした図書館の構造を検討している。ウェブが示唆しているように、そこで用いられた資料は、まさしく公共図書館には潜在的な構造があり、しかも一般的に多くの諸特徴がそれた図書館に共通しているということを実証している。彼の目標とするところは、社会におけるその位置づけをより良く理解するために、公共図書館の構造を明らかにすることにある。ウェブは決して十分にはその高遠な目標を達成してはいないけれども、現代の公共図書館の組織について、大量な詳細な情報を提供している。ところが、彼の結論があまりにも沢山の意味のない専門用語を使ったあげく、容易に理解しうることではかないのは、残念である。もっとも、それなりに有用であることはもちろんであるが。とくに彼の組織文化に関する議論に対しては、遺憾な点が多く残されている。図書館を組織するために必要な官僚制と質の高いサービスを提供するために必要は専門職との間に葛藤がひそんでいるとする彼の基本的結論は何も新しい考えでなく、ウェブは消して十分に適切な見通しのもとにその考え方を示してもいるとも言えない。ウィリアムズもウェブも、究極的には、その詳細を極める研究にもかかわらず、社会における公共図書館の役割について、マーチンやモルツが短いが一層明解ではるかに重要な意義をもつ哲学的論稿で行ったのと同じだけの知見を私たちに教えるものではない。

■フレデリック・A・シュリップ (Frederick A. Schlipf) [アーバナ無料図書館・イリノイ大学アーバナ・キャンペーン校図書館情報学大学院] の書評

<Library Quarterly (60) '90, July所収>

本書は、当該分野の指導者たちのあらわしたものを手がかりとして、アメリカ公共図書館が、時代の変化に応じて、その社会的役割を画定しようとし、また、それを守ろうとしてきた様々な動きに関する歴史をたどったものである。著者は、彼の主張を裏付けるために、種々のアメリカ図書館協会が発した公式表明や公共図書館調査の如き主要な調査研究、そしてウィリアム・F・プールやチャールズ・カッターからローウェル・マーチンやトム・バラードにいたる広い範囲の図書館員が明らかにした諸見解を援用している。

アメリカ公共図書館の興味深い特質のひとつは、目的を探し求める組織という傾向を持っていることである。しかも、これまで 125年以上にわたりアメリカ公共図書館界の指導者たちは、果てしない時間を公共図書館の存在意義そのものとともに、公共図書館にふさわしい目的を定めたり、定め直したりを繰り返

返すことに費やしてきた。

バトリック・ウィリアムズは、1930年代の初期以降の全国レベルでのアメリカ図書館協会が発表した目的についての諸々の声明に対し特に注意を払いながら、1850年代のその始まりから『公共図書館に関する計画策定と役割設定』（Chicago:ALA,1987）の公刊にいたるまで、この公共図書館の目的に関する歴史を取り扱っている。そこで議論されている目標や問題は、よく知られているものである。すなわち、初期に民衆の大学及び読者をつまらない作品から引き離し高度な文献へを誘うという問題関心が持たれていたことから、戦後館界で地域社会の検討、計画策定手続、社会的なアウトリーチ、サービス評価及び情報提供機関としての図書館が強調されるまでを対象としている。

この歴史を通じて、ウィリアムズは、たえず熱狂的に新しい目標を告げている状況を検討し、次第に幻滅の度を深め、ついには他の目標を選んでこれらの目標を放棄するまでを描いている。ウィリアムズは、公共図書館の目的をただ非現実的なものに画定しようとする極めて沢山の試みを否定し、公共図書館員たちがすでに成功をおさめていないことを認識し、新しい利益に向かって歩み続けてくるにつれて、数年来の多くの熱狂的な取組がたんなる自然死に終わろうとしていることを示唆している。

それに加えて、ウィリアムズは、いくつかのうまくいった目標についても、それらが公共図書館の唯一の正統的な役割が自己教育のための機関としての役割、すなわち民衆の大学であるという彼の個人的な信念と一致していないという理由から、否定している。したがって、実際のところを言えば、この本は公共図書館の目標に関する長きにわたる伝統的議論の歴史を書いたものであるばかりか、その議論それ自体に貢献するものとなっている。ウィリアムズが大変強く支持している20世紀の出版物は2つあり、それらは公共図書館は「子供、学生および成人のための非公式の自己教育の拠点」であるべきであると主張している。ひとつはバーナード・ベレルソンの『図書館の対象とする公衆』（New York:Columbia University Press,1987）で、これは図書館がそれらを最大限利用する十分な教育を受けたエリートに集中的にサービスをしていることを指摘している。いまひとつは、新しく出された『公共図書館に関する計画策定と役割設定』である。というのは、ウィリアムズはそれが教育的役割を他のすべての役割にまさっているものとしていない事実を嫌っているにもかかわらず、それが公共図書館の主要な役割のひとつとして教育に言及していることから、本



書では支持を与えているのである。この本を読んだ公共図書館員は、ロバート・エリス・リーの『成人のアメリカ公共図書館を通じての継続教育：1833-1964』がごく最近出たけれども、1960年以降の時期を対象に含めているため、その歴史的流れの要約が役に立つと感じるであろう。ALAのすべての様々な基準や声明および手続きを歴史的な脈に適切に位置づけ、その歴史的変遷を迫った業績はほとんど存在しない。ここではいくつかの歴史的趨勢に従った事件が実際に起きたよりももっと規則正しく並べられており、そのような歪曲は公刊されたものを寄せ集めたものの中に明確な傾向を見出そうとしたとき必然的に結果するもののように思われる、と考える者がいる。

多くの公共図書館員たちは、程度の差こそあれ、彼らの同業者連中が時に行き過ぎた表現をすることにうんざりしているけれども、ウィリアムズが熱心に唱える見解にはおそらくめんくらうことであろう。『地域社会の検討』(Chicago;ALA,1960)、アウトリーチ・ブーム、『公共図書館の改革のための戦略』(Chicago;ALA,1972)、「公共図書館の使命に関する宣言」(American Libraries 8 [December 1977]:616)、『公共図書館のための計画策定手続』(Chicago;ALA,1980)、および『サービス評価』(Chicago;ALA,1982)のどこかに何かすべての図書館員を耳目をそばだたせるものがあるが、ウィリアムズはそれらをほとんど例外なく否定している。

彼はまた、公共図書館の唯一の正統的機能が自己教育を支援することであるとする彼の見解を支えるべく熱心に論じている。たとえば、図書館利用の増加をめざす直截的な試みを論難している。すなわち、「図書館統計は、……多分に数字を伸ばし、おもに自らの経歴と評価を高めようとする図書館員の指摘かつ個人的な目的を満たすために利用される傾向がある。そのことは、職務に不誠実であり、墮落である」と述べている(p.128)。たいていの成人の図書館の利用と享受の理由がそうであるにもかかわらず、彼は通俗的で人気のある資料の貸出を軽蔑している。彼いわく、「プランナーたちに対し、そのような役割を必要とするニーズに類似の何ものかの発見に努めさせるべきである。……その役割のもつ諸利益〔『公共図書館に関する計画策定と役割設定』に数え上げられている〕は、理性あるプランナーたちを説き伏せて取り除かせてしまえばよい」(p.134)。そして、彼は—おそらく賢明にも—全国規模の議論を無視し、ひたすら地域社会が望んでいるサービスを提供し続けている公共図書館員の大多数の中核的部分を次のように述べて、しりぞけている。「(彼

らは)ただたんに事故の利益から沈黙を守っている人々、次にあげる〔公共図書館調査の〕諸勧告によって仕事から追い払われてしまうかもしれないと思っている人たち、〔および〕公開の議論に対する臆病さまたは資質ないしはそうしてむよいとの気持ちの欠如から、とにかく沈黙を決めこんできた人々(すぎない)』(p.79)。

『アメリカの公共図書館とその目的に関する問題』は、最初の公共図書館がそのドアを開いたとき以来、公共図書館の指導者たちが取組んできた問題について、十分な歴史的概観を与えるものではあるけれども、2つの弱点をもっている。すなわち、第1は主として実務に即したものというより指導者たちの意見を集めたものであるということ。第2には、この著作が評価を含んだ歴史と公共図書館に関するひとつのかなり狭い見解を立証するための議論との両方を同時に試みたことがあげられる。

図書館職員や図書館委員会、または図書館学研究者が現実に図書館にそうあって欲しいと望んだかどうかは別にして、公共図書館の歴史を通じて、市民たちは図書館を広汎かつ利用しがいのある個人的な楽しみの源泉だと見なしてきた。この中心的な機能を手中から捨てることによって、また多くの図書を所有しているという経済的な諸利益を無視することによって、ウィリアムズはもともと長きにわたり認められ、一番実質的な公共図書館の存在意義に属するものの2つを受け入れることを拒否しているのである。

【住所変更等】

## 図書館史研究9号(1993)

< 内容 >

天満隆之輔他／森耕一先生追悼．山本順一／アメリカ図書館協会の歴史．  
油井澄子(訳)／図書館員の資質と責務について  
日外アソシエーツ刊． 定価1350円



8月28～29日

第11回図書館史セミナーご案内

申し込み期限：7月31日まで

日時：1993年8月28（土）－8月29（日）

会場：椋山女学園大学

JR名古屋より地下鉄東山線〈星ヶ丘駅〉下車徒歩10分

参加費：7000円

申込先：川崎良孝

8

その他：

- ①今回は緑陰セミナーです。参加者が全員各自数十分間、現在の自分の研究を報告します。
- ②2日目午後は総括討議に当てます。
- ③宿泊は各自で手配して下さい。
- ④申し込み人数が確定した時点で詳しいプログラム及び会場案内をお送り致します。

会費納入のお願い

ニュース・レター48号でご報告しましたように、本年度よりA会員B会員の区別がなくなりました。会費は本年度分より一律3,000円となりましたのでお間違えのないようお願い致します。

同封の振込用紙をご利用下さい。なお未納分については同封の明細書をご確認の上、納入くださいますようお願い致します。